

病虫害発生予報 第4号(7月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	いもち病 紋枯病 縞葉枯病 ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ	並並並 やや少 並並並	野菜全般	ミナミキイロアザミウマ ミカンキイロアザミウマ シロイチモジヨトウ	やや多 並並
			カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアザミウマ ゴマダラカミキリ	やや多 やや多 やや少 並並 やや少 並
ウリ科野菜	疫病 うどんこ病 つる枯病 炭疽病	並並並	カキ	炭疽病 うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並 やや多 やや多 並 やや少
ナス科野菜	疫病	並	モモ	せん孔細菌病 カイガラムシ類	多 少
野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類	やや少 県北部:並 県中部:やや少	果樹全般	カメムシ類	やや少

気象予報

1か月予報 (予報期間 6月25日～7月24日 大阪管区气象台)

< 予想される向こう1か月の天候 >

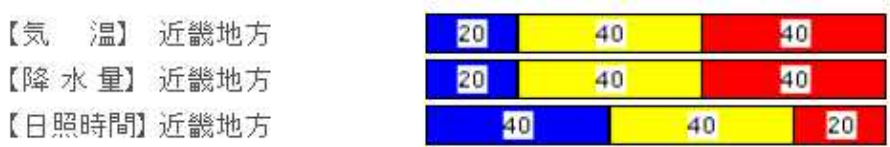
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並の確率50%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

		月平均気温 (平年値) (℃)	月降水量 (平年値) (mm)
7月	和歌山	27.0	和歌山 145
	潮岬	25.5	潮岬 291

I. 水 稲

1. いもち病(葉いもち)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部(田辺市以南)の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%(平年0.4%)であった。
- ② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 補植用苗は葉いもちの発生源となるので、早急に処分する。
- ② 常発地および「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」等の罹病性品種では発病しやすいので初発時期に注意し、発生がみられたら直ちに薬剤防除する。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部(田辺市以南)の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%(平年0%)であった。
- ② 県北部・中部の普通期栽培における前年9月上旬の発病株率は17.7%(平年18.0%)であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 梅雨明け後の高温期から病勢が急激に進展するので、常発地や前年の多発ほ場では幼穂形成期～穂ばらみ期の防除を徹底する。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県南部(田辺市以南)の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%(平年0%)であった。
- ② 県北部・中部の普通期栽培における前年9月の発生面積率は0%(平年14%)であった。
- ③ 県北部におけるヒメトビウンカ(越冬世代)のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市3地点で平均4.6%(過去9年の平均15.5%)、かつらぎ町で4.9%(同15.2%)であった。
- ④ ヒメトビウンカの7月の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカの防除を行う。
- ② 第2世代成虫は6月下旬頃に水田に飛来し、第3世代幼虫の発生最盛期は7月上旬頃と考えられることから、前年に縞葉枯病の発生が認められた地域では、幼虫を対象にこの時期の追加防除を行う。

4. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部(田辺市以南)の早期栽培における6月中旬の25株あたり生息密度は0頭(平年0.1頭)であった。
- ② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭(平年3.0頭)、上富田町0頭(平年0.1頭)、那智勝浦町1頭(平年0.3頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 育苗箱施薬剤を施用した6月田植えのほ場では、縞葉枯病の発生が認め

られる地域以外は7月の防除は必要でない。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり生息密度は0.5頭（平成0.5頭）であった。

② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市4頭（平成1.6頭）、上富田町1頭（平成28.6頭）、那智勝浦町27頭（平成13.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 育苗箱施薬剤を施用した6月田植えのほ場では、7月の防除は特に必要としない。

6. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり生息密度は1.3頭（平成9.4頭）であった。

② 予察灯への初飛来は、紀の川市では6月16日（平成6月10日）、上富田町では4月5日（平成6月16日）、那智勝浦町では6月12日（平成6月17日）であった。

③ 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市14頭（平成31.2頭）、上富田町11頭（平成35.6頭）、那智勝浦町64頭（平成12.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ツマグロヨコバイに準ずる。

7. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり生息密度は0頭（平成0頭）であった。

② 4月1日～6月20日まで予察灯への飛来は認めていない（初飛来平成：紀の川市7月19日、上富田町7月5日、那智勝浦町7月3日）。

③ 予察灯による6月1～20日の誘殺数はいずれも0頭（平成：紀の川市0頭、上富田町0.2頭、那智勝浦町0.1頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ツマグロヨコバイに準ずる。

8. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり被害葉数は0葉（平成0葉）であった。

② 紀の川市の蛍光灯誘殺箱による6月1～20日の誘殺数は0頭（平成0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 第1世代の発蛾最盛期は平成7月下旬頃である。防除適期は、粒剤の場合は第1世代の発蛾最盛期、その他の薬剤（乳剤、水溶剤、フロアブル等）の場合は第2世代幼虫発生時期（第1世代の発蛾最盛期の7日後）である。

② 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼ

す影響は小さいので、県南部の早期栽培では防除の必要性は低い。

Ⅱ．野 菜

<ウリ科野菜>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（平年0）であった。
- ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（過去8年の平均0%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場の排水を良くし、冠水や滞水を防ぐ。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（過去4年の平均0%）であった。
- ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（過去4年の平均2%）であった。
- ③ 県北部の施設栽培キュウリにおける6月中旬の発生ほ場率は38%（平年30%）であった。
- ④ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、他系統の薬剤とのローテーション散布を行う。

3. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（平年2%）であった。
- ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（平年8%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布にあたっては株元にも薬液が十分かかるように行う。

4. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（過去5年の平均12%）であった。
- ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は7%（過去5年の平均26%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病した茎葉や果実は、ほ場外に持ち出す。
- ② 降雨日が連続すると多発する可能性があるので、長雨が予想される場合は予防散布を実施する。

＜ナス科野菜＞

1. 疫病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（過去2年の平均0%）であった。
 - ② 県中部の露地栽培ミニトマトにおける6月中旬の発生ほ場率は10%（過去3年の平均11%）であった。
 - ③ 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 梅雨末期の多雨で急激に病勢が進展するため、降雨前の予防散布に努める。予防散布ができなかった場合は降雨後に早急に防除する。
 - ② ほ場の排水を良くし、多湿にならないようにする。

＜野菜全般＞

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の生息葉率は、モモアカアブラムシ0%（平年5.6%）、ワタアブラムシ0.5%（平年7.0%）であった。
 - ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける6月中旬のワタアブラムシ生息葉率は5.8%（平年7.1%）であった。
 - ③ 黄色水盤（紀の川市）による6月1～20日の誘殺数は52頭（平年76.2頭）であった。
 - ④ 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性対策として、同一系統の薬剤の連用を避ける。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 県北部：並
県中部：やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は、カンザワハダニ38%（平年39%）、ナミハダニ38%（平年3%）であった。
 - ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける6月下旬の発生ほ場率は、カンザワハダニ17%（平年33%）、ナミハダニ0%（平年29%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性対策として、同一系統の薬剤の連用を避ける。

3. ミナミキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は50%（平年28%）、生息葉率は26.5%（平年5.4%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
 - ② 施設栽培では、栽培終了後に7～10日間以上施設を密閉して死滅させ、

後作の発生源にならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は13%（平成18年%）、生息葉率は2.5%（平成2.5%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部のトンネル栽培スイカにおける6月下旬の被害果率は1.3%（平成2.6%）であった。

② フェロモントラップによる6月1～20日の誘殺数は、紀の川市6頭（平成5.1頭）、御坊市32頭（平成44.6頭）、印南町4頭（平成65.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。

② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉の芯部に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。

③ 施設栽培では、栽培終了後に20日程度施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の発生園率は28%（平成20%）、発病果率は4.3%（平成2.4%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① マンゼブ・マンネブ剤の場合、前回の薬剤散布からの累積降水量が250mm程度となった時点で散布する。

② 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

③ 過乾燥等で樹勢が衰弱すると枯枝が増えるおそれがあるので留意する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の春葉の発生園率は25%（平成18%）、発病葉率は1.8%（平成1.0%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生園では銅水和剤を散布する（薬害軽減のための措置を講じる）。強

風雨前の予防散布が重要である。

- ② 罹病葉は果実への伝染源になるので剪除する。
- ③ 防風ネット設置などの防風対策に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の発生園率は22%（平年38%）、発生葉率は6.7%（平年13%）、100葉あたり雌成虫数は14頭（平年58頭）であった。

② 7月の気象予報による。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

① 高度の薬剤抵抗性系統が出現しやすいので、対策として97%・98%マシン油乳剤の散布を励行する。ただし、高温強日射時の散布は薬害が発生しやすく、7月中旬以降の散布は果実品質を低下させるおそれがあるので、散布は7月上旬までとする。

4. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生時期 第2世代1齢幼虫初発日 7月11～15日
発生量 並

- (2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における第1世代1齢幼虫の初発は5月7日（平年5月17日）であった。

② 県予察ほ場、各地域とも第1世代幼虫の発生量は平年並であった。

③ 7月の気象予報による。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

① 6月下旬に防除できなかつた園では、7月上旬のうちに97%・98%マシン油乳剤やスプラサイド乳剤40を散布する。

② 未成熟成虫がみられる場合はスプラサイド乳剤40を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、由良町）における黄色粘着トラップによる6月中旬の誘殺数は137頭（平年392頭）であった。

② 7月の気象予報による。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

① 地域での発生消長調査の結果を参考に適期防除に努める。

6. ゴマダラカミキリ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

① 県予察ほ場、各地域とも成虫の初発は平年より早かったが、6月中旬の発生量は平年並であった。

② 7月の気象予報による。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生園では成虫の捕殺に努めるとともに、薬剤を散布する。

② 発生の多い園では7月中旬以降に、産卵防止および食入幼虫対象の防除として薬剤を主幹から株元に散布する。

<カ キ>

1. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における6月中旬の発病新梢率は「富有」・「平核無」・「刀根早生」いずれも0%（平年0%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。

② 密植園や風通しの悪い場所は発病しやすいので、園内の通風・採光をはかる。

③ 薬剤は発育枝にも十分散布する。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部における6月中旬の発生園率は「富有」65%（平年52%）、「平核無」・「刀根早生」29%（平年20%）であった。発病葉率は「富有」3.4%（平年3.1%）、1.2%（平年0.6%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に散布する。

② 梅雨明けまでは好適な気象条件や園地条件で発病を繰り返すので、二次伝染の防止に努める。

3. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」での発生園率は82%（平年32%）、発病葉率は9.2%（平年4.7%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 子のう胞子飛散は5月下旬～7月中旬の降雨後に多く二次感染はしない。

② 5月から8月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に散布する。

4. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」での発生園率は77%（平年78%）、発病葉率は14.8%（平年19.5%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 分生子の飛散は5月上旬から始まり、7月下旬まで続く。二次感染を繰り返す。

② 円星落葉病と同時防除できる。

5. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部における6月中旬の発生園率は「富有」6%（平年52%）、「平核無」・「刀根早生」0%（平年13%）であった。

② 県北部における6月中旬の寄生果率は「富有」0.1%（平年6.5%）、

- 「平核無」・「刀根早生」0%（平年0.4%）であった。
③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期である。
② 県予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における近年の第2世代ふ化幼虫の初発は7月22～27日頃であり、次回の防除適期は8月上旬頃と予想される。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

- (1) 予報内容 発生量 多
(2) 予報の根拠

- ① 県北部における6月中旬の発生園率は100%（平年64%）、発病葉率は7.9%（平年3.6%）であった。
② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防風ネット、防風樹の保守点検を行う。
② 伝染源除去のため、収穫後に夏型枝病斑や発病葉の多い枝を剪除する。
③ 翌年の伝染源軽減のため、秋季に無機銅水和剤を散布する。

2. カイガラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 少
(2) 予報の根拠

- ① 県北部における6月中旬のウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシの発生園率は0%（平年9%）、雌成虫寄生枝率は0%（平年0.6%）であった。
② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期の直前に薬剤散布を実施する。
② 近年の第2世代ふ化幼虫発生盛期は、ウメシロカイガラムシが7月1～5日頃、クワシロカイガラムシが7月11～15日頃である。

<果樹全般>

1. カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
(2) 予報の根拠

- ① 県北部におけるチャバネアオカメムシ越冬成虫の捕獲頭数は、落葉50リットル当たり0.5頭（前年0.4頭、平年0.3頭）、捕獲地点率は31.0%（前年31.1%、平年17.3%）であった。
② 県中部・県南部におけるチャバネアオカメムシ越冬成虫の捕獲頭数は、落葉50リットル当たり0.0頭（前年0.2頭、平年0.7頭）、捕獲地点率は0.0%（前年11.1%、平年23.9%）であった。
③ 紀の川市粉河の予察灯での6月中旬の誘殺数は、チャバネアオカメムシが110頭（平年40頭）、ツヤアオカメムシが40頭（平年88頭）であった。
④ みなべ町東本庄の予察灯での6月中旬の誘殺数は、チャバネアオカメムシが138頭（過去6年の平均270頭）、ツヤアオカメムシが69頭（同769頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 園内への多飛来を確認したら早急に薬剤散布を行う。

- ② 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所コーナーの果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○**農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

○**和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。